

そをかうしてゐる中に何處からともなく、六七人の若者が現はれて、僕をとり圍んで擲りかゝつた。

僕も拳骨を固めて應戦したのだ。

めがねは割られる。着物は裂けた。

けれども僕は仆れなかつた。

一人一人頬桁を食はした。

頭らしいのがしまひにしかめ面をして、口をモゴモゴさせて、僕の前に立つてゐる。

『君達の方から亂暴をしかける奴があるか、僕は自動車を借りて、川崎まで行かうと思つてゐるのだ。』

僕は言つた。

交番の前に巡査が二人立つてゐても、知らぬ風をしてゐる。

相手も弱つたのか打ち掛かつて來ない。

電車が通ひ初めた。